様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０７１５

研究課題名（和文）１０－１６世紀北インドのヴァナキュラリズムと国家

研究課題名（英文）Vernacularism and State in 10-16th Century North India

研究代表者
三田　昌彦（Mita, Masahiko）

名古屋大学・文学研究科・助教

研究者番号：３０２６２８２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円、（間接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：10－16世紀ラージャスターンおよびグジャラートの地域王権について、勅書に見られるサンスクリット語から地方語への公用語の転換を柱に、国家システムの変化とそのメカニズムを論究した。その結果、10～13世紀の地域王権はサンスクリット文化を基盤に非在地的性格を帯びていたが、14世紀後半から現れる地域王権はその性格を大きく変えて地域性を強く志向するようになることが明らかにされた。16・17世紀以降の地域政権の政治的集権化のプロセスや城郭都市建設の進行も、また同時代のラージプート政体であるクラン・システムも王権の地域性志向の中で説明できることを示した。

研究成果の概要（英文）：This research explores changing state system of the regional dynasties in the 10th - 16th-century Rajasthan and Gujarat, mainly focusing on change of the official languages used in copper-plate royal charters from Sanskrit to local languages in the period of vernacularisation. As a result, we tentatively conclude that while the regional powers emerging from peripheral areas in the 10th-13th centuries had not necessarily formed regional state but rather aimed at conquering the whole India as a chakravartin, the kingdoms emerging from the late 14th century onwards adopted local languages as their official languages and apparently intended to form regional state rooting in the vernacular culture. This vernacularisation can explain the political centralisation of the Rajput kingdoms and the fortification of their capital cities, both of which progressed from the 16th or the 17th century onwards in Rajasthan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：インド　王権　サンスクリット　地方語　地域主義　ラージプート　サーマンタ　銅板文書

１．研究開始当初の背景

サンスクリット語史料を扱う「古代史家」とペルシア語史料を扱う「中世史家」は、これまで相互にほとんど交流することがなく、南アジア史研究は 12 世紀末をもって分断される傾向にある。近年チャットーパディヤーヤやクルケらによって、7－12・13 世紀は地域国家形成の時代だと提唱されており、他方で 1970 年代からジーグラーをはじめ「中世史家」によって 15 世紀からの地域国家形成が注目され、ともに通説になりつつある。しかし、いったい両時代のプロセスは同じパターンの繰り返しなのか、あるいは異なる歴史プロセスなのか、これまで議論されたことがない。上記のような研究上の分断の中、両時代の比較はおろか、両時代の研究者は互いに相手の研究に触れることさえなかったために、そもそもこのような疑問自体が提示されることがなかった。その結果、両時代に見られた「地域国家形成」プロセスは、いまだに南アジア史全体の中に位置づけられないままである。

両時代の「地域国家形成」を歴史的に位置づけるうえで注目すべきなのは、13 世紀と 15 世紀の間に現れる、北インド在地社会での様々な変化であり、筆者はこれまでの研究において、その変化の諸相を仮説を交えつつ論じてきた。

- 公用語のサンスクリットから地方語への転換
- サーマンタ体制の崩壊からマンサブ＝ジャーギール体制およびクラン体制への転換
- サンスクリット語による王統譜・叙事詩から地方語による叙事詩・歴史書への転換
- ワタン的地域団体システムの形成へ
- 新興王家が多数出現、すなわち地域レベルの勢力交替
- 地方中核都市の転換（中核地の移動）

これらの諸点はいずれも南アジア世界におけるヴァナキュラリズム（社会・文化の地域主義・在地化）の本格的展開を示すものではないかと考えている。

こうした視角は、Ｓ・ポロックが文学史研究の立場から議論を展開しているが、本研究はこれを歴史学の立場から、社会変動および国家・在地社会秩序の再編の問題としてとらえ直す。

なお、13－15 世紀の社会変動は、デカン・南インドにおいてもタルボットや辛島昇らによって指摘されてきた。辛島はこれを南インドの古代と中世の分水嶺として位置づけているが、時代区分はともかく、この時期が南アジア全体で進行した変動期であったことは明らかである。

また、この変動期 13－15 世紀は、家島彦一、杉山正明など近年の超地域的な歴史研究によれば、モンゴル帝国の成立によるユーラシア・インド洋交易の活況から、帝国崩壊後の地域秩序の再編と港市国家の繁栄という、ユーラシア・レベルの変動期でもある。南アジアにおいて、それは北インド内陸帝国（トゥグルク朝）の繁栄・崩壊と近世的地域国家の析出のプロセスとして、ユーラシア史の中に位置づけることが可能だと思われる。南アジアのヴァナキュラリズムは、他地域との比較を通して、より大きな次元での世界史的展開の一局面として位置づけられるものであろう。

２．研究の目的

本研究は、インド史において地域政権の活動が目立った 10-16 世紀の北インド、とくにラージャスターンおよび グジャラートの地域を対象とし、14 世紀以降における地方語に基づく国家のヴァナキュラリズム（地域化）のプロセスが、それ以前のサンスクリットに基づく 10-13 世紀の地域政権といかに異なるのかを考究することを通して、南アジア史における 14・15 世紀の転換の意味を明らかにすることを目的とする。同時に、そのプロセスとユーラシア・レベルの動向との連関を探っていく。

３．研究の方法

具体的な分析対象は、銅板文書をはじめとする公文書、およびプラシャスティ（王朝頌徳文）や施与記録などを記す刻文史料、さらに 15 世紀頃を境に構造的な変化を見せる城砦・城郭都市であり、それらに見られる変化を地域王権の形成が繰り返された 10～16 世紀に渡って精査し、この時代の国家システムの政治的・文化的転換を、王権のヴァナキュラー化の文脈で説明していく。また南アジアの諸勢力の動きをユーラシア・レベルの動向との連関で探っていくときに、中央ユーラシアと南アジアをつなぐ地政学的な構造のあり方（定着農耕地帯と乾燥移動民地帯の関係とその構造的変動）に焦点を当てる。

４．研究成果

(1)10–13 世紀地域王権の画期性と帝国性

10–13 世紀のチャーハマーナ朝とチャウルキヤ朝の寺院刻文・銅板文書のプラシャスティおよび戦勝記念碑を精査した結果、この時代の地域王権は、古代以来の定着農耕地帯を中核とする帝国建設ではなく、辺境を中核とするサーマンタ体制の帝国建設を志向している点に新しさがあり、辺境を帝国にふさわしい中心地と主張するために巨大ヒンドゥー寺院を建立し、サンスクリット文化の理想的帝王とされたチャクラヴァルティンを目指したこと、その背景には、辺境とされていた乾燥・半乾燥地帯における開発（井戸灌漑とペルシア式揚水機の普及を伴う）があったことが明らかになった。（雑誌論文①、学会発表②⑤）

(2)サーマンタ体制の変質からクラン体制・

パッタ制へ

①銅板勅書の様式と発給のあり方を分析した結果、9 世紀のプラティーハーラ朝では宗主勅書もサーマンタ勅書も＜施主＝告知者＝発給者＝王＞の様式が形式上貫かれ、その文書様式に合わせて発給過程もそれぞれ独立しており、互いに内政不干渉とされるサーマンタ体制の王権連合的性格が典型的に表れている。しかしチャウルキヤ朝では、サーマンタ発給の勅書においてこの様式が崩れだし、さらに同王朝の衰退期である 13 世紀には、サーマンタの自立化が進行する中で、宗主王朝自らこの様式を崩し、内政不干渉というサーマンタ体制の原則を破ることでサーマンタ勢力を管理・統制下に置こうとした。このことはサーマンタ体制が否定される 14・15 世紀以降の体制の前提として位置づけることができる。（雑誌論文⑦⑨、学会発表⑪）

②14 世紀後半以降、銅板勅書は本来の勅書様式から全く外れ、サンスクリット語ではなく主としてプラークリット語で記されるようになり、さらに 16・17 世紀には地方語による書式が整ってくる。興味深い事実は、かつてサーマンタ発給の勅書に記されていた宗主への従属関係に関わる文言が消滅していること、諸王の系譜やプラシャスティ（頌徳文）が記されなくなったこと（石碑に刻まれたり歴史書が編纂される）、銅板の大きさ・厚さも文字数までも極めて短小軽薄になったことである。銅板勅書がかつてほど王権にとって重要な文書ではなくなっていること、したがって君主と従属勢力との確執を示す対象ではなくなっていることを示す。（未発表）

③如上の変化は、そのまま国家システムの変化にも対応している。内政不干渉を前提とする王権連合的性格のサーマンタ体制の国家は、外延的拡大による帝国化を目指していたために既存の土着勢力をそのまま従属下に置き、普遍主義的なサンスクリット文化によって雑多な地方文化を持つ従属勢力を統合していた。しかしペルシア語を公用語とするデリー=スルターン朝がインド全域に影響を及ぼす 14 世紀以降に出現してきた地域勢力は、以前の地域勢力と比較すると在地志向が強く、宮廷においてサンスクリット語の絶対性が崩れる中で公用語の地方語化を進め、流動的でローカルな口語の世界がリージョナルな文字言語によって徐々に一つの地域文化にまとまっていく中で、征服地の統治を既存のローカルな勢力ではなく王家の同族の者に委任するクラン体制へと統治政策を転換させる。それは王国全土の直轄化を意図したパッタ制への前提を作ることになったと考えられる。（学会発表①⑬）

(3)山上城砦から城郭都市へ

衛星画像と現地調査および刻文史料の分析からつかんだ傾向として、8～13 世紀のラージャスターンの地域王権は、完全な都市機能を有す大規模な山上城砦を築いてそこを王都とするケースが目立つが、14～15 世紀を過渡期として、16・17 世紀以降はもはやこうした城砦は築かず、むしろ王宮を山麓ないし山腹に築いて山麓の市街部をも城壁で囲い込む城郭都市を建設するようになっていく。これはおそらく 16 世紀以降、商品経済の進展の中で、ハヴェーリー（邸宅）をはじめ市街部に富が蓄積していき、宮廷が市街区の保護を政策として打ち出した結果と考えられる。同時にこれは、王権が在地に根ざした権力形成を志向したことの表れであるとの仮説を提示した。（学会発表③⑧⑨⑭）

(4)中世ユーラシア世界の動向と南アジアの連関

西暦 1000 年頃から気候状況の好転も手伝ってユーラシア世界全体で乾燥・半乾燥地帯の活性化が進行し、それに伴って遊牧勢力が定着農耕地帯へと進出、牧畜と交易を主とする乾燥移動民地帯と定着農耕地帯とにまたがる帝国を建設するような動きが起こってくる。10–13 世紀に乾燥・半乾燥地帯に出現した南アジアの地域王権もまた、辺境の農業開発および内陸交易ネットワークの緻密化を伴いつつ、乾燥地帯と定着農耕地帯との連結の進行の中で生み出された王権であり、上記のユーラシア世界全体で進行していた動きの一部を成していたと解釈できる。またその地域王権のサーマンタ体制が帯びていた非在地的性格もまた、こうした広域権力の時代に適合的であった。しかし、14 世紀半ばのモンゴル帝国の瓦解と気候状況の悪化は、一時的ではあれ在地志向の地域主義的傾向をつよく地域権力に促したのではないかと推測をたてた。（雑誌論文②③④、学会発表④⑩⑬）

(5)研究の位置づけ

本研究の成果と視点は、以下の点に画期性があると考える。

①チャットーパディヤーヤらの地域国家形成論が伝統的な 12 世紀末で区切る時代区分を打破する意義をもつのは確かであるが、彼らのように 7 世紀以降近代に至るまでのプロセスを同質の長期の歴史的プロセスとして理解するのではなく、14 世紀をエポックと捉え、中世初期と中世後期で繰り返される地域国家形成を、言語文化の変化を伴った異なる歴史段階のプロセスとして位置づけて両時代をつなげている点。

②王権や国家を論ずる際に法典文献、文学作品、宗教文献ではなく、王権の権力執行を直接表現する勅書を利用し、しかもこれま

での研究のようにその内容を恣意的に解釈するのではなく、勅書の様式と発給のパターンを探る中から国家システムのあり方およびその変化を論ずる点。

③地域政権の変化のプロセスを、デリー=スルターン朝の動向やユーラシア世界の動きといった、より広域のスケールとの連関の中で位置づけている点。その際に当時の政権が南アジアやユーラシア世界をどのように地理的に認識し、いかなる国家建設を目指していたかといった、地政学的なアプローチを行っている点に、とりわけ気候変動によってその地政学的状況が変化するといった視点に特質がある。

(6)今後の展望

①14 世紀以降の勅書様式・発給の分析を従来通り進めていく。すでに大筋でその傾向は捉えたが、今なお史料の収集には困難が伴っており、今後も収集に重点を置いて研究を進めていく。

②城砦・城郭都市の構造的変化は、本研究の過程において偶然判明した歴史的変化であるが、まだ研究の端緒であるので、今後は何よりもまずデータの集積が必要であり、将来的にはインドの研究機関との共同研究・発掘調査が必要となる。前者については 2014 年度より、科研費補助金基盤研究 C「北インド中近世城郭史研究」として、すでに開始している。

③気候変動とともに当時の地政学的構造が変動することについてはまだ仮説の域を超えておらず、今後もデータを収集していく必要がある。とりわけ 14 世紀以降の状況については、まだほとんど手を付けていない。研究対象が地域としても研究分野としても筆者の守備範囲を大きく超えているので、この方面について共同研究を立ち上げていく必要がある。

④南アジア勢力の地政学的分析について筆者は、本研究が対象とした 10～16 世紀だけでなく、前 3 世紀のマウリヤ朝時代以来の変動について仮説を提示しており、王都がパータリプトラからカナウジ、さらにはデリーへと移動し、地政学的構造が大きく変動してきたこと、それは基本的には辺境である乾燥・半乾燥地帯の開発や交易ネットワークの転換などによって引き起こされていると見ている（雑誌論文③⑤、学会発表⑩⑬、拙稿「カナウジの帝国」『世界歴史大系南アジア史１』山川出版社、2007 年）。今後はこの方面の実証を積み重ねていく。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

① 三田　昌彦、10–12 世紀インドの地域王権とチャクラヴァルティン―地域神・統王・普遍主義、歴史の理論と教育、査読有、139 号、2013、19-34

② 三田　昌彦、アフロ＝ユーラシア世界と南アジア史―アンドレ・ウィンク『アル＝ヒンド―インド＝イスラーム世界の形成』、歴史評論、査読有、757 号、2013、43-49

③ 三田　昌彦、中世ユーラシア世界の中の南アジア―地政学的構造から見た帝国と交易ネットワーク、現代インド研究、査読有、3 号、2013、27-48

④ MITA, Masahiko、Review: Noboru Karashima, *South Indian Society in Transition: Ancient to Medieval*、*International Journal of South Asian Studies*、査読有、Vol. 5、2013、153-158

⑤ 三田　昌彦、南アジア世界の歴史、朝倉世界地理講座第 4 巻南アジア（朝倉書店）、査読有、2012、32-49

⑥ 三田　昌彦、コスモポリタン文化と地域文化―政治＝文化史的視角からの世界史、歴史評論、査読有、746 号、2012、35-39

⑦ 三田　昌彦、チャウルキヤ朝宗主勅書様式論、名古屋大学文学部研究論集（史学）、査読無、57、2011、87-107

⑧ 三田　昌彦、中世インドにおける下賜文書の範例（15 世紀）、世界史史料集第２巻（岩波書店）、査読有、2009、52-53

⑨ 三田　昌彦、中世インドにおける土地寄進（9 世紀末）、世界史史料集第２巻（岩波書店）、査読有、2009、50-52

⑩ 三田　昌彦、チャウルキヤ朝のサーマンタ体制（10-14 世紀）、世界史史料集第２巻（岩波書店）、査読有、2009、49-50

⑪ 三田　昌彦、中世初期ラージプート王朝の起源伝承（9 世紀）、世界史史料集第２巻（岩波書店）、査読有、2009、48-49

⑫ 三田　昌彦、書評：水島司『前近代南インドの社会構造と社会空間』、南アジア研究、査読有、21 号、2009、191-197

〔学会発表〕（計１４件）

① 三田　昌彦、中世初期ラージプートの政治システム、科研費補助金基盤研究 B「ユーラシア諸帝国における君主と軍事集団の展開」（清水和裕代表）第 4 回研究会、2014 年 3 月 30 日、神戸大学

② MITA, Masahiko、Sanskritized Imperialism and State Integration in Early Medieval North India (c. 950-1200)、The Second International Symposium of Inter-Asia Research Networks, Toyo Bunko, March 8-9, 2014, 東洋文庫（東京）

③ 三田　昌彦、インド中近世（8–18 世紀）

城郭の構造的変遷：ラージャスターンを中心に、名古屋歴史科学研究会10月例会、2013年10月26日、名古屋大学

④ MITA, Masahiko、Comment to the lecture of B.D. Chattopadhyaya, “The Nature of Change in Early Medieval India”、東京大学東洋文化研究所セミナー、2012年9月26日、東京大学

⑤ 三田　昌彦、10-12世紀インドの地域王権とチャクラヴァルティン、名古屋歴史科学研究会大会、2012年6月2日、名古屋大学

⑥ 三田　昌彦、「イスラーム」はいかにインドを統治したか―中世ムスリム国家と寺院破壊、名古屋歴史科学研究会12月例会、2011年12月23日、名古屋大学

⑦ 三田　昌彦、移行期の東アジア認識：コメント、歴史科学協議会大会、2011年11月26日、立教大学

⑧ 三田　昌彦、ラージャスターン中近世の王都と城砦、日本南アジア学会第24回全国大会、2011年10月2日、大阪大学

⑨ 三田　昌彦、インド中近世の城砦と城郭都市、インド文化の会、2011年5月31日、名古屋市東生涯学習センター

⑩ MITA, Masahiko、Medieval Arid India Connected to Eurasian History: for Understanding Medieval Global India from Ecological Perspective、INDAS国際シンポジウム“Understanding Global India: The South Asian Path of Development and its Possibilities”、NIHUプログラム現代インド地域研究主催、2011年1月29日～30日、京都市国際交流会館

⑪ 三田　昌彦、サーマンタ体制下の施与勅書発給―プラティーハーラ・チャウルキヤ両王朝の銅板勅書様式より、日本南アジア学会第23回全国大会、2010年10月2日、法政大学

⑫ 三田　昌彦、文化資源としてのインド中世「史料」、第43回南アジア研究集会、2010年9月24日、静岡市

⑬ 三田　昌彦、中世北インド論、現代インド・南アジアセミナー：南アジア・マクロヒストリー講座、2010年9月18日、京都大学

⑭ 三田　昌彦、インド中近世城郭史研究序説―ラージャスターンを中心に、中部南アジア研究会、2009年8月1日、名城大学

〔図書〕（計２件）

① 川北稔、桃木至朗、小杉泰、指昭博、杉本淑彦、清水和裕、杉山清彦、吉澤誠一郎、三田昌彦、青野公彦、帝国書院、新詳世界史B、2012年、320頁＋図表6頁

② Ｓ・スブラフマニヤム、名古屋大学出版会、接続された歴史―インドとヨーロッパ、三田昌彦・太田信宏共訳、2009年、376頁

６．研究組織

(1)研究代表者

三田　昌彦（MITA, Masahiko）

名古屋大学・文学研究科・助教

研究者番号：３０２６２８２７